

出張講演@東京都立総合工科高等学校

二〇一二年一月二日

被災地のその後を記録したドキュメンタリー番組を視聴して学んだこと、そして、これからの自分の人生に役立てたいこと
教諭 佐々木 純

(一)はじめに

吉野作造記念館の御協力を得て「他者との共生のための他者理解」について、東日本大震災を事例とし人と人との共感や支えあいを観点に探求する授業実践をした。本校は進学重視の新しいタイプの工業高校で、三年選択の倫理で実践した。震災から時間が経過し被災体験に乏しい生徒が共感的に受け止められるか不安があったが、教材に落涙する生徒もいた。

(二)授業のねらい

倫理は高校における道德教育として、人間の生き方に関する教育の役割が期待されている。学習指導要領に、生命に対する畏敬の念に基づいて他者と共に生きる主体として



の自己形成が目標に設定されている。命に対する畏敬の念に根ざした人間尊重の精神を培うことで、人間が他者との関わり合いの中で調和的に生かされた存在であることを自覚させることが出来る。故に、自己の生き方も他者への共感

と共生の中で追求させる必要がある。更に、この他者との関わりについて主体的に適切な関係がもてるように自己を確立させなくてはならない。

(三)達成するための方法

このねらいを達成するには、生徒個人に身近な生活経験を事例に考察させるべきだが、個別的で全体として共有すべき課題とはなりにくい。そこで、生徒全員が体験した東日本大震災で被災した同世代の人たちの体験に共感し自己の生き方を省察させることにした。

(四)学習活動

授業構成として、まず、被災地のその後を記録したドキュメンタリー番組を視聴しながらワークシートを各自作成する。次に、各グループ内で意見交換してグループ毎に発表する。最後に講師の先生からコメントを頂戴しディスカッションする活動を実施した。

(五)事後指導

他者の尊重と他者への奉仕を考察させるため、まず、他者とは何かに就いて「他者には私にはないものがあるから尊敬」とするとしたレヴィナスの考えを紹介した。次に、尊敬すべき他者をなぜ蔑ろにするのかについて、ハーバーマスの「他者とのコミュニケーション」の中に生きていることを忘れていくから、対話的理性で合意形成していくことが求められるとした考えを提示した。更に他者への奉仕に就いてサルトルの「自己の行動は社会に対して道德的責任をもつこと」という考えを前提に、ハイデガールの「困っている人に必要なことを与えることではなく、その人が能力を発揮できる手伝いをする」と。そのことで、自己実現と他者の尊重の両立がはかれる活動」にすることが、望ましい奉仕であると指摘した。

うに考えるか。以下の作品に結実した。

レポート①

三年二組 加賀美一菜

私がこの映像を見て学んだこととして、人の心の痛みや辛さを勝手にわかった気にならないこと。また、毎日自分の身の回りにいる大切な人達に思いやりをもって必死に生き抜いていくこと。そして、できる限り、後悔をしないような生き方をするのだと思います。

まず、「他者との共生のため他者理解」について考えていきます。

震災が与えた精神的傷としては、自分の大切な人が突然死んでしまった現実をなかなか受け入れることができないことである。あまりにも衝撃的なことすぎて、頭では現実をわかってはいるつもりでも、行方不明者の方のお葬式を行おうとしたりすると、「まだ死んだと決まったわけではない」と拒んでしまったりなど、簡単に「死」というものを受け止めることはできないのだと

思います。

その精神的傷をどのように克服していくかについては、人と人との絆というものを大事にしていくこと、亡くなった人達を思い出す時が大切。その人達を思い出す時は震災の時のような悲しい記憶ではなくて、一緒に過ごした楽しい記憶で思い出さうと、できるだけ、仲間のことを「思う」ことが一番心に記憶させられるのだと思います。

また、亡くなった人達については、亡くなってしまった仲間の誕生日を祝うなどして、絶対にその人達を忘れないようにすることが大切。その人達を思い出す時は震災の時のような悲しい記憶ではなくて、一緒に過ごした楽しい記憶で思い出さうと、できるだけ、仲間のことを「思う」ことが一番心に記憶させられるのだと思います。

さまざまな事情をもった人達と共生していくには何が必要なのかというと、周りの人達がどういう環境なのかを考慮することが大切だと思う。自分一人では絶対に生きられないし、自分が思っている以上に他者から思われているから、自分のことはかりではなく周りの人達のことも考えて生きていく必要があると思います。

す。ありふれた日常生活を送っているあたり前のことが意外に忘れがちなのだと思います。

以上の「他者との共生のため他者理解」を踏まえたいことで、これからの自分の人生に役立てたいことを考えていきます。

他者についてレヴィナスは「他者には私にないものがある」と言っており、他者の重要性を知ることが大事なのだと思います。また、ハイデガーは「本物の奉仕はその人の能力を発揮させる手伝いをする」と。そうすることで、相手も自分も成長できるからなのだ」と。閑上中学校での出来事もそうでしたが、平日頃から周りの人達を思い出すことが一番大事です。自分のことだけで精一杯のよくないつばいつばいの生き方では自分のことはもとより、周りに迷惑をかけることになり。毎日を後悔しないように生きていくのは難しいことではあると思います。しかし、後悔を一生背負って生きていくことほど辛いことはないと思うので何もせずに

ただ生きていくより、努力をして必死に毎日生き抜いていくべきなのだと思います。

レポート②

三年一組 和田翔太郎

私は震災から時間がたち少しだけ震災が起きた時のことを忘れてきた。

授業で被災地の中学校の映像を観て震災の起きた時の事を思い出した。映像の中で大切な人を亡くし、辛い体験をしたにも関わらず助け合いながら前に進むという一瞬懸命に生きている被災地の中学生やその親達にも心を打たれた。

しかし何故、大切な家族や



友人を突然失うという言葉に出来ないような辛い体験をして出来ているのか。それは、同じ体験をした人達で支え合っている生活をしているからではないかと私は思う。とても自分一人だけで抱え込んでいてしまっている精神的にも肉体的にも限界が来てしまったり、自分命を断つようなことをしてしまってもいい。そうならずに前向きに生きていられるのは、亡くなった人達の方まで生きなければいけない思いもあるかもしれないがやはり他人と支え合い、辛い思いを分かち合いながら過ごしているというのが一番大きいだろう。

今までありえなかった生活でも過していきことが出来たのは、親戚や家族で悲しみを分かち合うことが出来たからだろう、とても自分一人だけでは決して耐えることはできなかったらと思う。被災者の方に比べれば私を感じた「喪失感・悲しみ」というのも大したことがないかもしれない。それでも一人きりでは耐えることが出来なかったのだから、他人と支え合いながら、悲しみや苦しみを分かち合いながら生きていくというのがやはり人間にとって一番大切なことなのだ。「他人なんてどうでもいい、他人と助け合わずとも自分だけで生きていく」ことが出来るという人もいるだろうと思う。それでも私は、他者と共存し助け合いながら生きていく方が人間らしくいい生き方だと考える。自分だけの事を考えるのではなく他者の気持ちを理解し、助け合って生きていけるような人間になれるようにこれからの人生の一日、一日を大切に過ごして行けるようにしていきたい。